

中海の漁業実態調査（刺網、ます網）

（中海有用水産物モニタリング事業）

清川智之

1. 研究の目的

中海の代表的な漁業で、ほぼすべての魚種の周年的な出現動向を把握しやすいます網と、成魚を積極的に漁獲している刺網の魚種や漁獲量を詳細に把握し、中海の有用魚類の有効活用を図るための基礎資料を収集する。

2. 調査方法

① 標本船調査

漁業実態および有用魚介類の動態を把握するために、刺網1地区（江島）、ます網2地区（東出雲、本庄）で、漁業者各1名に操業日誌の記帳を依頼した。

② 漁獲物買取り調査

ます網2地区（本庄、東出雲）において、月1回の頻度で全漁獲物の買取りを行い、出現魚種や体長組成等を調査した。

3. 調査結果

① 標本船調査

今年度の刺網の年間漁獲量は平年（過去5年平均、以下同様）よりも約1.2トン少ない6.6トンで、平年の84.7%であった（添付資料-表1）。魚種組成は、ボラとスズキの2魚種が漁獲の大半を占めており（90.8%）平年と同様であった。

今年度のます網の年間漁獲量は本庄では2.2トン、東出雲では2.2トンで、過去5年平均（2016～2020年度）と比較して本庄は0.4トン少なく、東出雲は1.0トン多かった（添付資料-表2、3）。今年度の主要魚種の組成を過去5年平均と比較すると、本庄ではスズキ、クロソイ、モクズガニ、ウナギ、ヒイラギが増加し、アカエイ、マハゼ、マアジが減少した。東出雲でスズキ、ヒイラギ、モクズガニ等ほとんどの魚種で増加したが、マハゼは減少した。

② 漁獲物買取り調査

本庄水域：買取り調査を開始した2008（平成20）年以降、今年度までに確認された魚介類を取りまとめたところ、魚類が14目46科の92種、軟体類が3目3科の5種、甲殻類が1目8科の17種で、合計18目57科114種であった（添付資料-表4）。

今年度の出現種の組成を尾数割合（添付資料-表

5）でみると、ヒイラギとサッパの2種で全体の65%を占め、次いでマアジ、カタクチイワシ、スズキと続いた。

東出雲水域：買取り調査を開始した2008年以降、今年度までに東出雲水域で確認された魚介類を取りまとめたところ、魚類が14目40科の79種、軟体類が1目1科の2種、甲殻類が1目6科の14種で、合計16目47科95種であった（添付資料-表4）。

今年度の東出雲の出現種の組成を尾数割合で見ると（添付資料-表5）、ヒイラギとサッパの出現尾数の割合が最も高く、この2種で91%を占め、次いでマアジ、スズキ、コノシロと続いた。